

美杉村水没地区調査報告について

東海学園が美杉村当局より、大洞山麓の約3万坪の土地の提供を受け、学園教育の一環として「山の学寮」を設置し、多数の学生生徒の入村が始まりましたのは、昭和40年の夏からでした。そして、これを機縁として、美杉村と東海学園とは、教育文化の面において深い関係におかれるようになったのです。

ところで、東海学園は「山の学寮」の設置と同時に、全学園の先生方によって「学術調査団」を構成し、先ず美杉村における衣食住及び教育文化の実情を科学的に調査し、同村の村民各位の物心両面にわたる生活の向上発展のために協力申し上げることとなりました。

以来、専門の先生方は、毎夏、その都度同村に学生生徒を助手として出張せられ、順次調査をすすめると同時に、その都度、村当局、特に婦人会などの御協力を得て、調査の実情と結果を村民各位に報告申し上げると同時に、更にその改善と向上のための助言や対策を提供して来ました。調査団の学術報告書は一応40年度より3カ年間を目標としてのものでありましたが、今回にわかに同村水没地区（君ヶ野・宿広・大河内）の調査の依頼を村当局よりお受けいたしましたのであります。水没を目前にひかえて急を要するために、41年の夏より冬にかけまして、数次にわたって同地区の調査をすすめ、一応ここにまとめられたのであります。

「路傍の宝蔵」という言葉があります。仏教哲学の最高を説いている華嚴經の入法界品にある有名な言葉であります。入法界品と言いますと、あの善財童子の53人の善知識の訪問で有名であります。善財童子に先き立って、文殊菩薩が南方に向かって歩いて行かれるのです。ところがこの文殊の姿を舍利弗たち多数の仏弟子が見送って驚くのです。それは文殊が歩いてゆくところでは、けわしい道もおのずから平坦なところになって、歩いてゆかれる路ばたには、すばらしい宝が自分の方からすすんでほくりほくりと出てくるという表現であります。現代の私たちは、ひどろ路傍の一塊の土くれに、或は名もない草の葉1枚に、何の興味も関心も持ち合わせてはおりません。足で踏みつけて知らずに平気でおります。しかし、文殊即ち本当の智慧の眼をもって見つめれば、1塊の石、1茎の葉にも、まことに尽きせぬ、天地無限の歴史をくみとることが出来ますし、まことに深い感動をおぼえざるを得ません。親子先祖代々が、歴史を生きてこられたその遺産というものは、その大小を問わず人間の生活の記録として、まことに尊い不滅の意義を有するものであります。

今回、水没地区の調査にあたられた学園の各先生方は、いずれもこうした尊い気持をもって、村から村へ、山をこえ谷をわたってその調査整理のために歩かれたものであります。それらの諸先生の労を多とするとともに、将来、この調査書が美杉村の歴史に長くのこることを願って筆を擱く次第です。

昭和42年7月

東海学園学術調査団長
東海学園女子短期大学副学長

林 靈 法